



柳田国男監修高等学校国語科教科書における单元「 文章の筋道」をめぐって

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 比呂己, 佐野, 理美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000125

柳田国男監修高等学校国語科教科書における 単元「文章の筋道」をめぐって

佐野比呂己・佐野理美

キーワード 昭和30年代 読書 論説 漢文 天野貞祐 柳宗悦 中谷宇吉郎 韓愈

はじめに

稿者は、これまで柳田国男監修検定高等学校国語科教科書(以下「柳田高校国語科教科書」と略す)の各単元について、その構成を提示し、その特徴、学習のねらいを明らかにし、他単元との関連、所収教材⁽¹⁾について検討を加え、論考を発表してきた。

本稿では、これらの拙稿を受け、柳田高校国語科教科書における単元「文章の筋道」の構成を提示し、その特徴、学習のねらい、教材について検討を加えようとするものである。

1 単元「文章の筋道」の位置

柳田高校国語科教科書における単元「文章の筋道」の位置を確認する。単元「文章の筋道」は柳田高校国語科教科書、第1学年下巻に配置されている。柳田高校国語科教科書の単元構成は次の通りである。⁽²⁾

(第一学年・上巻)

- 一、随筆・随想
- 二、生活と記録
- 三、小説
- 四、古文入門
- 五、紀行

(第一学年・下巻)

- 六、学問への道
- 七、古典(中世)
- 八、文章の筋道
- 九、劇
- 十、言語と社会

(第二学年・上巻)

- 一、読書
- 二、事実と記録
- 三、表現
- 四、口語と口語文
- 五、書簡・書状

(第二学年・下巻)

- 六、詩
- 七、古典(上代一)
- 八、論述
- 九、翻訳
- 十、文章のあけぼの

(第三学年・上巻)

- 一、近代文学
- 二、古典(上代二)
- 三、国語の性質
- 四、批評する心
- 五、論説と討論

(第三学年・下巻)

- 六、人とことば
- 七、古典(近世)
- 八、国語の歴史
- 九、外国の文学
- 十、学問する心

国語の将来 柳田国男

単元「文章の筋道」は第1学年の第8単元に配置されている。他単元との連続性を確認し、他単元との関連についても検討を加える。

2 単元「文章の筋道」について

(1) 教師用指導書

単元「文章の筋道」のねらい、位置づけ、特徴等を教師用指導書⁽³⁾の記述をもとに確認していく。
単元「文章の筋道」の「単元設定の理由」の項の冒頭には次のような記述がある。

読むことの経験は、読みの目的の上から二つに大別される。第一は、知識や情報を得るための読みであり、第二は、鑑賞や娯楽のための読みである。⁽⁴⁾

「読むことの経験」について、その目的から大きく二つに分けている。大きく「知識や情報を得るため」の説明的文章と「鑑賞や娯楽のため」の文学的文章の二つである。ここで注目したいことは柳田高校国語科教科書が重点としてあげていた「読書」⁽⁵⁾ではなく、「読むことの経験」としている点である。「読むことの経験」が「読書」の基盤にあって、「読書」そして読書生活の充実、豊かさが実現するのである。

単元「文章の筋道」では、第一とする「知識や情報を得るための読み」に焦点をあてる。

第一の読みの対象、つまり素材としては、新聞・雑誌・一般教養図書・参考書などがあるが、高等学校におけるこの種の読みの指導の中で、最も重点を置くべきものは論説・論文の読み⁽⁶⁾の指導である。

「知識や情報を得るための読み」の素材として、「新聞・雑誌・一般教養図書・参考書など」をあげ、最も指導に力を入れるものとして「論説・論文」をあげる。

柳田高校国語科教科書では、「読むこと」の現状認識、問題意識を述べた上で、「論説・論文」を取り上げる理由について次のように記述している。

この期の生徒には、文学に猛烈な食欲を感じて作品を耽読すると同時に、人文科学や自然科学などのかかなり高度の内容を持った書物に勇敢に飛びつくものがある。しかも、実際は教科書に載っている簡単な論説文でも、生徒はその真意をとらえるのに苦労している。筆者が何をいおうとしているのか、概念的につかむことはできても(それすらできない生徒が多いのだが)、それがどのような論拠に立って、どのような論旨の進め方をしているのか、強調している点はどこなのかをたどってゆくことのできる生徒は少ない。哲学書をむさぼり読むような生徒に、論理的な展開をしている文章をたんねんに読ませてみると、案外つまずいてしまうことがよくある。文章を読む訓練が足りないからである。読んだ冊数の多いのをいたずらに誇るだけで、はたして彼らが読んだものをおのれの血肉となしえているかどうかは怪しいものである。論説や論文⁽⁷⁾を読む際の基本的な技術を身につけさせ、読書の空転から救い出すことはぜひ必要なことである。

柳田高校国語科教科書の高校生の「読むこと」の現状認識を次のように整理できる。

- ① 文学作品を耽読し、高度の内容を持った書物を読む高校生が存在する。

- ② 簡単な論説文でもその真意をとらえるのに大部分の高校生が苦勞している。
- ③ 哲学書を読むような高校生でも、論理的な文章を読ませてみるとつまずいてしまう。
- ④ 本を読んだ冊数が多い高校生でも、読んだものが「おのれの血肉」になっているのか疑問である。
- ⑤ 読書が空転している。

当時の高校生にとって論説文を読むことに苦しんでいたという認識を示している。加えて、読んだ冊数の多い高校生も読んだものが「おのれの血肉」になっていないことを危惧している。「知識や情報を得るため」の読書はどれも大切であるが、高校生にとって「論説・論文」を読むことに特に苦勞しているからこそ、重点を置くというのである。

それらの問題は「文章を読む訓練が足りない」ことに起因し、「論説や論文を読む際の基本的な技術を身につけさせ」ることで克服しようとして単元「文章の筋道」が設定されたことがわかる。

さらに、この単元での学びにより、「読書の空転」から脱却させようというのである。第1単元「随筆・随想」からここまで連続して読書生活の拡充を目的の一つとして一貫していたが、ここで「文章を読む訓練」「基本的な技術」を学ぶことが読書生活そのものが充実したものになるとする。ここでの「読むことの経験」が豊かな読書生活に導くことになるというのである。

それでは、具体的にどのような学びを想定しているのか確認する。

この単元では、論説文を資料として、その文章の筋道がどのような展開をしているか、精密に調べさせることにした。生徒は、すでに、単元「学問への道」で、そうとう手ごたえのある論説文を読んできており、特に、論理的な思考とは、どんなものであるかは一応理解したはずである。そうした学習の上で、本単元で論説文読解の基本的な技法を身につけさせ、さらに発展として、論説文の書き方を会得させることができたと思う⁽⁸⁾。

正に、この単元での学習のキーワードは単元名である「文章の筋道」である。教材文を資料とし「文章の筋道」の展開を精密に調べることで、論説文読解の基本的な技法を学ぶとしている。学習者は第6単元「学問への道」で手ごたえのある論説文を既に学んでおり、論理的な思考については、理解したという前提に立っている。

さらに、論説文の書き方を会得させることまでの応用、発展することを期待しているのである。書き方を会得することで論説文を読む際の理解がいつそう進むという考えからであろう。

グループごとに論旨やその展開を究明させて、効果のある学習をさせたい⁽⁹⁾。

これらの学習について、グループで行うことを奨励している。高等学校において、教授型授業ではなく、調べ学習、グループ学習といった学習者の能動的な活動を目指していることは興味深いものがある。

ここでの学びとして、具体的にどのようなものがあるか、「単元設定の理由」よりその観点が4点抽出できる。

- ① 筆者が何をいおうとしているのか
- ② どのような論拠に立って、どのような論旨の進め方をしているのか
- ③ 強調している点はどこなのか

④ どのような展開をしているのか

いずれも論説文を読む上で重要なポイントである。
ここで、単元「文章の筋道」の学習目標を確認する。

- 1 文章の各段落の大意と要旨をとらえる。
- 2 文章の組み立て方を読みとる。
- 3 文章の叙述の仕方の特徴をつかむ。
- 4 論旨について批判する。
- 5 論説文の書き方を知る。
- 6 漢文に読みなれる。

1では文章の段落ごとに読解を進めていこうという方針が見える。段落ごとの大意と要旨をとらえ、習熟を目指している。このことが、文章全体の大意、要旨をとらえる前提となるのである。

2では、1での段落ごとの読解を踏まえ、それぞれの文章の構成の仕方、「文章の筋道」をおさえようとするものである。それぞれの筆者が持論を展開するため、どのような論拠のもと、どのように論旨の進めているのか、確認するものである。このことにより、文章全体の大意、要旨をとらえることが容易となるのである。

3では、表現方法について注目させようというものである。読者に対し、持論を効果的に伝達するためどのような叙述が適当か検討するものである。

4では、文章全体の大意、論旨を理解した上で、自分自身の考えと相対化し、批判的に検討しようとするものである。

学習者は、4での批判的精神が大きくなればなるほど、その内容を何らかの形で自己表現として発したいという思いが強くなるはずである。そういった思いの強さが、5の「論説文」の書き方を知る学習の意欲につながってくる。その際に1、2、3での学びがいきてくることはいうまでもない。

6は漢文に関するものである。単に「読む」ではなく「読みなれる」とあるから高次の読みを要求していることがわかる。歴史的視座からみれば、日本人は論理性を漢文から学んでいる。西洋の文献からの学びも当然必要であるだろうが、重厚な歴史と伝統の観点からいえば漢文の学びはとても重要なものである。しかし、柳田高校国語科教科書において漢文が題材となるのは、これが初めてのことであり、いきなり「読みなれる」レベルに到達することを求めることについては疑問である。

(2) 教科書リード文

単元冒頭にリード文がある。学習者に対し、学習内容、目的が記されている。リード文を確認する。

われわれの読書生活において、最も必要とされる能力の一つは、長い文章を読んで、すばやくしかも正確に要点をとらえる力である。文章を読んだ後の漠然とした印象にのみたよっては、複雑な論説文などでは要点をとり逃がしてしまうことがある。要点のとらえ方についての基本訓練が必要である。文章がどのような筋道によって展開しているか、文章の構成の要素にはどんなものがあるか、文章を展開するにどんな類型があるかなどについて考えておくことは、読解力を養うのに役立つこと

が多い。ここでは、四つの文章の筋道を明らかにすることによって、要点をとらえる力をつけるとともに、文章を作る時の参考とすることにした。⁽¹¹⁾

ここでも、柳田高校国語科教科書が最も重きを置く読書生活の充実に資する単元として設定されていることが明記されている。そのために、単元「文章の筋道」では「すばやくしかも正確に要点をとらえる力」を育成することが目的となる。要点をとらえるポイントとして、文章の展開、文章の構成、文章の類型を明らかにすることをあげ、読解力の育成にも関連するとも述べている。加えて、これらの学習がを実際に論説文を書く際の参考にするともしている。

3 単元「文章の筋道」の教材構成

単元「文章の筋道」は次の四編で構成されている。

- 一 今の世を生きぬく力(天野貞祐)
- 二 用と美(柳宗悦)
- 三 人工衛星(中谷宇吉郎)
- 四 師の説(韓愈)

教材選択について、教師用指導書では次のように記されている。

哲学者・工芸家・科学者のそれぞれ特異な材料による論説「今の世を生きぬく力」(天野貞祐)、「用と美」(柳宗悦)、「人工衛星」(中谷宇吉郎)と、中国の代表的な論説文といわれる韓愈の「師の説」とを資料にあげた。⁽¹²⁾

現代文と漢文の融合単元となっている。現代文三編については「特異な材料」についてどのように論じたのかを「文章の筋道」を追い、「師の説」については「文章の筋道」の視座から漢文を読むことになる。古来、日本人の論説のモデルは漢文にあった。「師の説」を学ぶことで「文章の筋道」の基本的な展開に触れ、単元目標にある「論説文の書き方を知る」に資するものとなるであろう。

一 今の世を生きぬく力(天野貞祐)

(1) 筆者・天野貞祐について

「今の世を生きぬく力」の筆者・天野貞祐について、教科書本文頭注に次のような記載がある。

◇天野貞祐＝〔一八八四―〕神奈川県生まれ。哲学者、教育家、文学博士。京都大学卒業。著書に「道理の感覚」「学生に与ふる書」などがある。⁽¹³⁾

天野貞祐は、明治 17 年(1884)9 月 30 日神奈川県生まれの哲学者である。京都帝大において、西田哲学に学び、カント哲学を研究し、『純粹理性批判』(岩波書店 大正 10 年(1921)2 月)を翻訳、大正期教養派の一人として『道理の感覚』(岩波書店 昭和 12 年(1937)7 月)を著す。個人主義人格主義に立脚し、人間本来の道理の感覚に発する意志の自由、行為の自発性を尊重し、全体主義を批判する。昭和 6 年(1931)母校京都帝大の教授をつとめ、戦後は甲南高校・一高校長ののち、昭和 25 年(1950)第 3 次吉田内閣の文相となる。六三制義務教育の充実、給食制度の推進につとめたが、国家の存在理由を強調し愛国心、道徳教育の復活を強調し、「国民実践要領」を提案して批判をうける。日本育英会会長などを歴任し、昭和 36 年(1961)文化功労者。昭和 39 年(1964)独協大初代学長。昭和 55 年(1980)3 月 6 日 95 歳で死去。主著には『純粹理性批判』(翻訳)『道理への意志』(岩波書店 昭和 15 年(1940)10 月)などがある。⁽¹⁴⁾

(2) 教材「今の世を生きぬく力」について

教材「今の世を生きぬく力」の原典について、教科書本文頭注に次のような記載がある。

◇真実を求めて＝一九五〇年 雲井書店刊。⁽¹⁵⁾

教材「今の世を生きぬく力」の原典は『真実を求めて』(雲井書店 昭和 25 年(1950)3 月)である。雲井新書シリーズの 1 冊目にあたる。2 冊目は武者小路実篤『愛とまごころに生きるもの』(雲井書店 昭和 28 年(1953)8 月)、3 冊目は長谷川如是閑『生活・叡知・思索』(雲井書店 昭和 28 年(1953)9 月)である。他に丹羽文雄『露の蝶』(雲井書店 昭和 30 年(1955)8 月)、片山敏彦『魂のよろこび』(雲井書店 昭和 30 年(1955)12 月)が発行されている。

『真実を求めて』の目次は以下の通りである。

今の世を生きぬく力	一九五〇年新年の言葉
われら何を為すべきか	学習の自由のために
文化国家への激励	日常性について
明日の日本を担う人々へ	既往逐う勿れ
若き世代のために	野球と私
若き女性の生きる道	野球の流行
幸福への道	読書について
家族の空気はいつも清らかに	永久平和へのあこがれ
人間の品位	平和宣言
常人と非常人	後語

『真実を求めて』の一番はじめに位置するのがこの「今の世を生きぬく力」となっており、重要な位置にあることがわかる。

『真実を求めて』の最後に「後語」がある。発行の経緯、思いが綴られている。

本書は「如何に生くべきか」(一九四九年六月刊行。雲井書店)を出して以来今日に至るまで、さまざまな機縁に応じて執筆した諸文章を集めたものであります。こゝに真実というのは、道といつても、道理といつても、神意といつてもよいのでありますが、それを知ること自体決して容易ではありません。さらに知った真実を実践することもまたしばしば困難であります。わたくしは生きゆく道の嶮しさを身にしみて思うものであります。

ことに敗戦のこの社会生活を真実に正しく生きることの困難を痛感せざるをえません。それにも拘らず、広い視野とゆたかな心とをもつて、あくまでも真実に、あくまでも正しく生きようとする人達に対して、生活勇気を失わず、生きぬく力を見出すために、本書がその一助となることを著者の希求して止まざる所であります。

『真実を求めて』は戦後の混乱した社会の中で、真実を求め、真実に生きたいという切なる願望より、機に応じて執筆した文章を集めたものである。

「今の世を生きぬく力」は、その後昭和47年(1972)5月、ポプラ社より現代の思想界の名士十氏の人生問題に関する著作を少年向けに編集した「私たちはどう生きるか」シリーズの一冊ともなっている。時代を経ても評価される証左ともいえよう。

教材化に際し、77⁽¹⁷⁾④以降にある原典の記述が削られている。

戦時中など個人ということ云々と個人主義などと云つて攻撃しましたが、この敗戦も結局は国民一般として個人の教養の度が高ければ世論の力が強くこんな無謀な戦争を始めるわけには行かないからであります。たとえ始めてももつと早く止めたのでありましょう。暴逆な力に引きずられたというのは、引きずるものの不都合は勿論ですが、引きずられた方にも責任があり、ことに——わたくしもそのひとりですが——社会の指導的位置にいた人達の責任は無視出来ません。各自にこの責任を思い、何とかして平和日本の建設に、各自の持場を通じて努力いたしたいのであります。⁽¹⁸⁾

「責任」という視座から戦時中の行為を反省し、各自がそれぞれの立場から努力することを求めている。教材「今の世を生きぬく力」の概要を下記の通りである。

人間は道理の感覚を持っており、人によって鋭い鈍いの違いはあるが、これを鋭くして不正なことは身体的にいやと思われる程度にまで高めて、それがいちいちの場合に発現するようにならねばならない。

人間はその行為をするにあたってしばしば過誤を犯す。しかしこの過誤をすなおに承認し、素直に認め、改めていけば、過誤はその人の道徳性を向上させ深めることになる。

道徳は時代によって変わるといわれるが、それは道徳の内容や現れ方が変わるのもであって、道徳そのものが変わるということはない。道徳は人間社会の根底であり、歴史を通じて発現するのである。

この世界は神とか道とかの支配される歴史の世界だという信念を持ち、そしてわれわれが歴史をつくりあげていくことが人生なのだと思えば、なにものをも恐れず勇気を持って生きることができるようになる。

「今の世を生きぬく力」の中核は「道徳」としてしている。「後語」と本文文末にある「生活勇気」もキーワードとなるであろう。私たちが「道徳」にしたがい、「生活勇気」をもって、今の世を生きぬくことを説いて

いる。

二 用と美(柳宗悦)

(1) 筆者・柳宗悦について

「用と美」の筆者・柳宗悦について、教科書本文頭注に次のような記載がある。

◇柳宗悦＝〔一八九九一〕東京都の生まれ。民芸研究家。東京大学卒業。著書に「茶と美」「工芸文化」「美の法門」などがある。⁽¹⁹⁾

柳宗悦は、明治 22 年(1889)3月21日東京都で生まれた。哲学者、美術評論家、民芸運動の創始者である。柳檜悦の三男。柳兼子の夫である。雑誌『白樺』の創刊に参加し、B・リーチを知る。西洋、朝鮮、日本の美術と宗教を研究した。宗教哲学研究のため渡欧し、帰国後、東洋大、明大、同志社大などで教鞭をとり、東洋美術国際研究会常務理事をつとめた。生活に根ざした民衆の工芸に美を発見し、「民芸」の語をつくった。浜田庄司、河井寛次郎らと民芸の普及につとめ、『工芸』を創刊した。昭和 11 年(1936)東京都目黒区駒場に日本民芸館を創設し、昭和 32 年(1957)文化功労者となった。昭和 36 年(1961)5月3日、72歳で没した。著作に『雑器の美』(工政會(昭和2年(1927)4月)、『美の法門』(私家本⁽²⁰⁾ 昭和24年(1949)3月)、『日本の民芸』(通信教育振興會 昭和24年(1949)4月)などがある。

(2) 教材「用と美」について

教材「用と美」の原典について、教科書本文頭注に次のような記載がある。

◇民と美＝一九四八年 靖文社刊。⁽²¹⁾

教材「用と美」の原典は『民と美』(靖文社 昭和 23 年(1948)6月)である。

『民と美』は上下 2 巻に分冊して上梓されている。2 冊に分冊されたのは「出版上の都合」⁽²²⁾によるとして
いる。

「序」には『民と美』の出版経緯が記されている。

この一書は前著「茶と美」の姉妹篇である。折を得て更に「物と美」の一卷を是等に添へたい。何れも造形美の世界が対象である。

「民と美」と題した所以は、この二つのものの間に深い結縁があることを語るためである。ここに納めた二十余篇のもの、多かれ少なかれ悉くこの真理に⁽²³⁾触れる。

『民と美』は、柳宗悦『茶と美』(牧野書店 昭和 16 年(1941))との姉妹編であり、造形美の世界を対

象としているという。この後、柳宗悦『物と美』（日本民芸協会編『柳宗悦選集』第8巻 春秋社 昭和29年（1954）9月）が続く。当然、姉妹編とあるのだから『茶と美』『物と美』も合わせて読むことで、『民と美』、さらには教材「用と美」をよく理解することができることになるであろう。

『民と美』と題した理由について、「民」と「美」の間に「深い結縁がある」からとしている。これまで、民衆の存在について美学、美術史において等閑視されていたことを批判し、民衆と美の世界の関連について述べ、民芸理論を展開している。柳田の民俗学と柳宗悦の民芸運動は、ほぼ同時期に展開されている。正に民衆の手によって継承、発展していった習俗、そして工芸に目を向けた点が共通している。教材選択に際し、柳田の思いがあったことが推測される。

目次は以下の通りである。

上巻

序
工芸の美
工芸の基礎
雑器の美
工芸的なるもの
工芸と美術
民芸の意味
職人の工芸
個人作家と民芸
個人作家の使命
作物の目標
民芸と模倣
挿絵解説
執筆年記

下巻

工芸に於ける自力道と他力道
他力門と美
貧と美
健康性と美
復古主義に就いて
民芸と農民美術
民芸品と貴族品
用と美
伎倆と技術と技巧
地方性の文化的価値
民芸運動は何を寄与したか
挿絵解説
執筆年記

「用と美」は『民と美』下巻に所収されている。「執筆年記」によれば『工芸』第106号（昭和16年（1941）10月）が初出であり、それを訂正加筆したものである。

「用と美」の概要を次の通りである。

実用性こそは工芸の本質であり、それは常に実用を離れないことがその性質である。建築・衣服・調度すべて実用を目的としてつくられている。

用いる人、用いられる対象の二つを結びつけるはたらき、機能が備わったとき、暮らしは円滑になる。

但し、用を物質的な用と限定するのは一面的な見方であり、それでは人間の暮らしをあまり狭隘に解しすぎることになる。生活はからだの暮らしであり、また心の暮らしである。

そこで、用いる人、用いられる対象、そしてそれらを結ぶ機能にはそれぞれ物心の二面がはたらいている。用には心理的用も含まれていることを強調して、生活への用途を物質的な意味に限定してしまうなら、工芸品は美しき工芸品たる性質を失ってしまう。

用を他の一面から考えると、触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚がいかに関与するかがわかる。

工芸の美に用の必然さが欠けたり薄らいだり、または美しさのための美しさとなった場合、工芸の美は美でなくなる。

このように、本文では、工芸の本質の実用性を分析して、用には物心二面のあることを説いている。加えて、用における美の要素を解明し、用と美とは相反するものでなく、用に即してのみ美のあることを強調している。

この文章の説得力は筆者の工芸に対する情熱と、具体的で適切な例を示し読者に対しわかりやすく丁寧に説明しているところにある。

工芸と美術は、どちらも美を体現するものとしての共通性を持つ。しかし、美術は純精神的なものであり、美のために美を追求する。美術はながめるためにつくられる。これに対して、工芸は美のための美を求めてはならない。実用にこたえるという前提があつてはじめて成立するものである。材料、形状、色彩、その他全てがこの用が求められるのである。但し、その用は単に物質的なものではなく、精神的なものをも兼ね備えるべきであることはいうまでもない。

用の美は、単に物質的なものではない。精神的要素、心理的要素、感覚的要素とを合わせもつものである。料理がただ飢えを満たすだけなら食べるに足る物質であればよい。しかし人間はそれだけで満足できない。料理はそこから始まるといつてもよい。物質的要素に心理的要素、感覚的要素が加味され料理は成立する。これは、あらゆる工芸について適用できる基本的な考え方である。しかし、これらの要素も、全て根底には実用がある。ただ、単に精神的に純粹で抽象的な美だけを求めるものとは、性格を異にする。ここに用の美の特質が表れるのである。

たとえば感覚的要素からとらえるならば、触覚として扱いよきこちよさ、視覚として見るためだけではなく用の機能の調和、聴覚として心地よく音、嗅覚としてよい香り、味覚として味をそこなわないものを要素として示すことができよう。

教材化に際し、原典との異同が散見される。本文を読む際には原典も参照したい。

ア 「実用とは」78 ③の直前で改行がなされている。

イ 「応ずることである。」78 ⑪の直後が削除されている。

だから「需用」とか「必需」とかいふ言葉が見える。この需めに応じて色々なものが拵らへられる。生活が複雑になれば、それだけ需めるものは多い。品物とは用途のために生れた存在をいふ。「用途」即ち「使ひみち」や「用どころ」のない品物はない。ここで品物が形を有つ具体的なものであるのは言ふを俟たない。

元来「用ゐる」といふ言葉は、「持つ」より由来するのであつて、形あるものを手に持つ意味である。それ故「用」は「はたらき」である。作用、効用、妙用など、様々に綴られてくる。だから或品が実用になるといふことは、それが「機能」を有つといふ意味である。機能を有つ造形品を工芸品だと定義してよい。易しく云へば「働きのある品」、「役立つ品」と説いてもよい。約言すれば、生活に役立たせるために、人間が作った品物、之が工芸品である。⁽²⁴⁾

ウ 「だからすべての」78 ⑪の直前で改行がなされている。

エ 「同じく水を」80 ③の直前で改行がなされている。

オ 「決められている。」80 ⑬の直後が削除されている。

それは唯物論が唯心論よりも、下凡の哲学だといふ考へにも現れてゐる。⁽²⁵⁾

カ 「すぎなくはないか。」80 ⑭の直後が削除されている。

唯物物といつても、観念に結ばれずして唯物物といふ考へを述べることは出来ない。純粹な唯物物といふやうなことは人間の生活面にあり得るであらうか。唯物論と雖も一つの哲学なのである。哲学なら一種の精神的思想である。唯物論自体は決して唯物的なものではない。⁽²⁶⁾

キ 「実用ということ」80 ⑭の直前で改行がなされている。

ク 「終わったであらう。」82 ⑮の直後が改行がなされ削除されている。

渴く時、人は水を飲む。それは両手でも飲めるであらう。大きな一枚の葉でも役立つであらう。だが出来るなら水呑を用ゐたい。もつと飲心地がよいからである。特に夏でもあれば硝子器を求めらるであらう。一番涼しい快適な心で水を味ふことが出来るからである。硝子器を適して水は更に水の姿を増してくる。之で人は水を愛しつつ水を飲むことが出来る。この悦びは水の味ひをすら増すであらう。だが冬であれば陶器がよい。特に温い茶にはそれが適する。なぜならそれが茶を更に茶にしてくれるからである。陶器を欠けば茶は充分に茶たることが出来ないとも云へる。⁽²⁷⁾

ケ 「自然の結果である。」84 ⑯の直後に「これらの用途を……危険が迫る。」85 ⑰～⑱が入り、その直後が改行がなされ削除されている。

ここで刺繍の歴史は興味深い暗示を投げる。それは只飾らんがための飾りではない。元来は刺子に始まり、刺子は縫ひに発したのである。着物に見られる刺繍の多くが、襟、肩、背、袖先、裾に見られるのは、かかる場所が一番痛み易く、いつも繕ひを要したことを語つてゐる。繕ひといふ實際的必要が、刺すこと求め、漸次に刺子着に進み、遂に模様刺に達し、それが装飾をも兼ねるに至つたのである。それは「美しき繕ひ」を語つてゐる。この必然さが刺繍に存在理由を与へてくれる。だが同じ刺繍が遠く用を忘れて、刺繍のための刺繍となる時、それは過剰な存在に入る。込み入つたごたごたしたものに美しさが却つて欠けてくるのは、当然な命数ではないか。視覚からだけで作るなら、正しい工芸品には成り難い。それは用を無視してくるからである。見ることが用ゐることの有機的な一部となつてこそ、物が見て美しいものになるのである。こゝでも用を離れたら見て醜い姿に陥らねばならぬ。⁽²⁸⁾

コ 原典後半の大部分がそのまま削除されている。

三 人工衛星(中谷宇吉郎)

(1) 筆者・中谷宇吉郎について

「人工衛星」の筆者・中谷宇吉郎について、教科書本文頭注に次のような記載がある。

◇中谷宇吉郎＝[一九〇〇—]石川県の生まれ。物理学者、理学博士。東京大学卒業。著書に「雪」「冬の華」などがある。⁽²⁹⁾

中谷宇吉郎は明治33年(1900)7月4日石川県加賀市で生まれた。物理学者である。東大物理学科において、寺田寅彦の薫陶をうけ、その学風を継ぎ、より進展させた。理化学研究所で電気火花を研究、昭和3年(1928)イギリスに留学して軟エックス線の究明につとめた。昭和7年(1932)北海道帝大教授となり、低温科学研究所長をかねて雪氷学の新しい領域の開拓者となった。昭和11年(1936)世

界ではじめて人工雪の製作に成功、雪の結晶の研究が世界的に知られる。また、雪のさまざまな結晶形ができる条件をあきらかにした中谷ダイヤグラムを発表し、昭和16年(1941)学士院賞を受けた。昭和37年(1962)4月11日、61歳で没した。随筆家としても知られ、寅彦の科学随筆をうけついで『雪の結晶の研究』(大日本気象學會 昭和13年(1938)2月)『冬の華』(岩波書店 昭和13年(1938)9月)『雪』(岩波書店 昭和13年(1938)11月)『続冬の華』(甲鳥書林 昭和15年(1940)7月)『第三冬の華』(甲鳥書林 昭和16年(1941)9月)『雪の研究 結晶の形態とその生成』(岩波書店 昭和24年(1949)3月)『Snow Crystals—natural and artificial』(Harvard University Press Distributed in Great Britain by Geoffrey Cumbrelege : Oxford University press 1954)のほか雪と雷に関する秀れた解説書が多い。小宮豊隆は、その随筆は「物の理」を学ぶ科学者であるとともに「物のあわれ」を知る詩人の成果であると評価している⁽³⁰⁾。

(2) 教材「人工衛星」について

教材「人工衛星」の原典について、教科書本文頭注に次のような記載がある。

◇文芸春秋＝一九五三年八月号 文芸春秋新社刊。⁽³¹⁾

教材「人工衛星」の原典は雑誌『文芸春秋』(第31巻第11号 文藝春秋新社 昭和28年(1953)8月 pp.180-193.)である。タイトルは「宇宙旅行の科学 ——人類の夢は実現するか——」である。全14頁の文章であるが次のような見出しがつけられている。

宇宙旅行の夢

ヒットラーの夢 アメリカに引きつがれる

人工衛星の力学

人工衛星の構想

地球から運ぶもの

地球へ帰るには

実現は可能か

もし人工衛星が出来たら

結び

教材「人工衛星」は「宇宙旅行の夢」の一部、「人工衛星の力学」「人工衛星の構想」「地球から運ぶもの」「地球へ帰るには」のほぼ全て、「実現は可能か」の一部で構成されている。「宇宙旅行の夢」の一部はリード文として独立して扱われ、「人工衛星の力学」「人工衛星の構想」「地球から運ぶもの」「地球へ帰るには」はそのまま見出しが使われ、「実現は可能か」は冒頭のみ「地球へ帰るには」に接続する形で教材化されている。

教材「人工衛星」の概要を記す。

宇宙旅行の夢の実現のためには人工衛星をつくることがその第一歩である。その可能性によって宇宙旅行が科学の問題になるか、空想小説の種になるかの分かれ目である。

まず、2時間で軌道に到達して、衛星速度に到達するロケットをつくる。このロケットに必要な材料を積んでいって宇宙空間でそれを組み立てて人工衛星をつくる。

ロケットが完成したら、そのロケットに構築材料を積んで発射し、人工衛星の構築地点に42間の

ドーナツ形のものをつくる。重力がないので人工重力をつくるためにこのドーナツ形の人工衛星を回転させる。地球から補給品を運んできたロケットのためドーナツの中心を通して一本の太いスポークをつくり、この中心を埠頭にする。

ドーナツができあがったら、空気と水を送ることになる。その時は空気はヘリウムと酸素とでつくった人工空気にし、水は氷にする。空気と水はそれぞれ回収の方法があるが、飲料水だけは回収の水では不十分である。食物は軽量で栄養価に富んだものを用いる。排泄物の処理は困難な問題であるが、その解決法としてロケットにくみとり船の役目をさせればよい。

空気との摩擦熱に耐える耐熱用の鉄でつくった機体で軌道から速度を落として逸脱し、50マイルの高度あたりで水平飛行、滑空飛行を経て旅客機で着陸する。ロケットの内部構造を700℃以上の高熱に耐えて人間を蒸し焼きから守るために強力な冷凍機をつくる必要がある。

人工衛星の実現は可能性がある。

当時の常識では考えられない人類の夢である宇宙旅行をすることができるかどうかを科学的見地から随筆風に綴られている。特に「地球から運ぶもの」では、空気や水を送ることの具体策、回収の道を示し、食物と排泄物の処理などについてユーモアたっぷりに書かれており、興味深く読みすすめることができる。この文章の叙述の仕方には次のような特徴がある。

- ア 科学の解説文を堅苦しくならず親しみやすさを大切にしている。
- イ 専門的な資料を十分に理解していることをいかし、のびのびと説明している。
- ウ 物理の複雑な法則でも、身近な日常の出来事を例に挙げ、分かりやすく説明している。
- エ 読者の肩を凝らせないよう、気の利いたユーモアを交えている。

原典「宇宙旅行の科学」の冒頭は「宇宙旅行の夢」という見出しのもと、次のように記されている。

宇宙旅行の夢くらゐ、素晴らしくて、又罪のない夢はない。さういふ夢に、いよいよ実現の可能性が出て来たのならば、これは戦争の悪夢にうなされてゐるわれわれには、何よりの清涼剤になるであらう。⁽³²⁾

この文章が戦後まもなく発表されたものであるとすると、「宇宙旅行」は「素晴らし」いものであり、「罪のない夢」であり、戦争の悪夢からの「清涼剤」であるとしていることは首肯できることである。学習者にとっても知的な好奇心を刺激する魅力的な教材であるといえよう。

四 師の説(韓愈)

(1) 筆者・韓愈について

「師の説」の筆者・韓愈について、教科書本文脚注に次のような記載がある。

◇韓愈＝[七六八一八二四]唐時代の文人。河北省昌黎県の人。儒者としてのみでなく、文学者と

してもすぐれ、柳宗元と並び称された。著書に「昌黎先生文集」四十巻などがある。⁽³³⁾

韓愈は唐代の文人、政治家である。唐宋八大家の一人。768年河北省昌黎県に生まれる。字は退之、号は昌黎、諡は文公である。徳宗、憲宗、穆宗に仕え、官は吏部侍郎に進む。四六駢儷文を批判し、散文文体(古文)を主張、柳宗元とともに古文復興運動に努めた。儒教、特に孟子を尊び、仏教、道教を排撃した。詩をよくし、白居易とともに「韓白」と並び称された。824年に没した。主著には『昌黎先生文集』40巻、『外集』10巻、『遺文』1巻などがある。⁽³⁴⁾

(2) 教材「師の説」について

教材文は、まず書き下し文が示されている。その書き下し文もこれまでの文語文と同様に文節を基準として分かち書きがなされており、「言語障害」を取り除く工夫がなされている。加えて、その後には白文に訓点を施した訓読文が示されている。学習者の状況により、書き下し文でも、訓読文でも、どちらを教材にしても読み進めることを可能にしている。両者を比較することで有機的に教材を扱うことも可能である。単元目標に「漢文に読みなれる」とあり、書き下し文から訓読文へと繰り返し音読することで目標に到達することを目指している。

本文の概要は次の通りである。

道が師の本質である。身分が尊いことや卑しいことを問わず、年長、年少を問わず、道が存在するところに、師は存在するのである。

古今聖愚のその(程度の)隔たりは益々大きくなっている。しかし、師について学ぶことを恥じている。だから聖人はますます聖人に、愚者はますます愚かになる。

自分の子を愛し、師を選んで学問をさせる。しかし自分の身において、師として学ぶことを恥じるのは惑いである。士大夫たる者がかえって賤工にも及ばないことを慨嘆するのである。

孔子は聖人には師が決まっておらず、「三人行へば、必ずわが師あり。」と述べている。

李蟠は古文を好み、古文である六芸の経と伝のすべてにわたってよく学んだ。「師の説」をつくって彼に贈るのである。

「師の説」は冒頭に主張が入り、その主張に対する実例を示し、主張を支える考えが説かれている。まず、「われは道を師とするなるなり。それなんぞその年のわれより先後して生まるるを知らんや。このゆゑに貴となく賤となく、長となく少となく、道の存するところは、師の存するところなり。」101 ⑥～⑨と主張を冒頭に打ち出し、師に従うか否かで聖愚の分かれるゆえんを説き、古今師道の有無は最後には古今聖愚の隔たりをなしたという。今の世の師弟関係を笑うものを不智なりとして、当時の天下の人情浮薄になって師たるを忌み、弟子たるを恥ずるを破らんとしている。最後に聖人の例を引いて師をとることは恥ずべきではないと説いている。

「師の説」に表れた韓愈の師に対する考えに対して、学問、スポーツ、生き方など現代にあてはめるものか否か自分事として考えさせたいものである。

4 「問題」について

教材「師の説」直後に「問題」が附されている。他の単元では教材ごとに末尾に「問題」が附されているが、単元「文章の筋道」は単元の末尾にあるのみである。単元の意識が強く単元を通じての「問題」となっているところに特徴がある。「問題」を確認することで、単元「文章の筋道」での学びのねらい、具体的な授業の展開が推測できる。「問題」は次のようにある。

- 一 それぞれの文章の各段落の大意と要旨を述べよ。
- 二 それぞれの文章の組み立て方について考えてみよ。
- 三 「今の世を生きぬく力」について、
 筆者は生きぬく力の中核として何を考えているか。
- 四 「用と美」について、
 - 1 この文章の説得力はどこから来ているか。
 - 2 次の点について筆者はどう述べているか。
 - イ 工芸と美術との違い
 - ロ 用における美の要素
- 五 「人工衛星」について、
 この文章の叙述の仕方にはどんな特徴があるか。
- 六 「師の説」について、
 - 1 この文章の論旨の進め方についてすぐれている箇所はどこか。
 - 2 この文章に現われた韓愈の考え方についてどう思うか。⁽³⁵⁾

これらの「問題」から、単元「文章の筋道」ではどのような授業が展開されるのか推測する。

- ① 文章の各段落の大意と要旨をとらえる
- ② 文章の組み立て方に着目する
- ③ 詳細な読解は行わず読解の着眼点から文章を読みとる
- ④ 文章の叙述の仕方の特徴をつかむ
- ⑤ 論旨について批判する

① 文章の各段落の大意と要旨をとらえる

「問題」一の「それぞれの文章の各段落の大意と要旨を述べよ。」がこれにあたる。柳田高校国語教科書では、読書生活において、一定の分量を持つ文章を読んで、すばやく的確にその内容をつかみ、要点をとらえる力を重要視している。漠然とした印象に終始しては、重要なポイントを見落としてしまうことがある。段落ごとに、その大意、要旨とらえさせることは、読解力を育成することに資することはいうまでもないことである。リード文に「要点のとらえ方についての基本訓練が必要である」とある通り、全ての段落を対象にドリルとして扱い、習熟することを目的としている。

② 文章の組み立て方に着目する

「問題」二の「それぞれの文章の組み立て方について考えてみよ。」がこれにあたる。

単元名が「文章の筋道」であるから、この単元での学びで最も重視したものであるともいえよう。文章全体の構造や流れ、論理的な展開について、どのような要素が結びつき論理構造を成立させているのか確認させたいところである。これらの要素を効果的に組み合わせることで、文章は整然として分かりやすくなるものである。段落相互の関係や情報が効果的に伝わるようにどのような工夫がなされているかにも着目させたい。

③ 詳細な読解は行わず読解の着眼点から文章を読みとる

「問題」三の「今の世を生きぬく力」について、筆者は生きぬく力の中核として何を考えているか。」「問題」四二の「用と美」について「次の点について筆者はどう述べているか。／ イ 工芸と美術との違い ロ 用における美の要素」がこれにあたる。

設問において、本文の一部分を示し、そこに着目して、説明したり解釈したりする設問があるのが一般的である。しかし、単元「文章の筋道」にはそういった設問はない。読解の着眼点を示すことにとどまっている。さらに「人工衛星」、「師の説」には読解に関する設問も設定されていない。文章の内容については、大意、要旨をつかむところにとどまり、文章構成、展開、叙述の仕方についての学びを重視していることがうかがえる。

④ 文章の叙述の仕方の特徴をつかむ

「問題」四一の「用と美」について「この文章の説得力はどこから来ているか。」「問題」五の「人工衛星」について、この文章の叙述の仕方にはどんな特徴があるか。」「問題」六一の「師の説」について「この文章の論旨の進め方についてすぐれている箇所はどこか。」がこれにあたる。

文章の叙述の仕方から、筆者の対象に対する思い、姿勢、考えを検討させたい。そのために、どのような工夫がなされているのか、②の学びを活かしつつ取り組ませたいところである。また、論理的に文章を叙述するための類型も意識させたい。これらの類型は、目的、相手、内容に応じて使い分けが必要であることも認識することであろう。加えて、読者に対して明確かつ論理的にさらには効果的に情報を提供するために、筆者がどのような叙述を行っているのか、それぞれの文章からその特徴をつかませたいところである。②、④の学びが、社会に出た際に必要とされる論説文の書く際の参考となるものである。

⑤ 論旨について批判する

「問題」六二の「師の説」について「この文章に現われた韓愈の考え方についてどう思うか。」がこれにあたる。本文の内容を把握した上で、韓愈の考えに対して意見を持たせたい。自分自身のこれまでの経験、今ここにいる状況、これからの自分を見据え、当事者意識をもって、共感したり、疑問を持ったり、違和感を覚えたことを言語化することは大切な学びである。

おわりに

以上、「柳田高校国語教科書」第1学年第8単元「文章の筋道」の構成、特徴、学習のねらいを明らかにした。

しかし、他単元との連続性、関係については踏まえる程度であり、詳述に至っていない。例えば、第1学年第6単元「学問への道」、第10単元「言語と社会」の両単元も含めて、「ことばの論

理」についての学びが接続されている。⁽³⁶⁾その連関についても詳細に検討すべきであろう。

「教材について」の項では各教材についての内容の詳述は避け、概要と教材の意義、そのポイントを簡潔に述べ、教材周辺の情報を整理することにとどまった。当然、教材についても詳述し、他単元、他教材との関係についても言及すべきであろう。

さらに、単元「文章の筋道」が、高等学校国語教室でどのように扱われたのかも確認が必要である。現代の国語教室においてはこれらの教材を活用し実践を行い、時代を超えてこれらの教材には価値があることも報告がなされている。一方で、当時の国語教室ではどうであったかについては十分に検討されていない。増淵恒吉は、この教科書を活用し授業に取り組んでいる。当時の授業の様子は、『増淵恒吉国語教室の実際 都立日比谷高等学校時代の国語学習記録（DVD—ROM）』（山本義美、世羅博昭編著 溪水社 平成26年（2014）7月）に残る。増淵は「柳田高校国語科教科書」の編集者の一人であり、「柳田高校国語教科書」を実際に活用していた。

『増淵恒吉国語教室の実際』には、都立日比谷高等学校での「国語学習記録」が学習者の手によって記されている。これを参照することで単元「文章の筋道」が当時の増淵の国語教室、国語科授業においてどのように扱われ、学習者がどんな反応であったかを明らかにすることができるであろう。

これらの課題については、別で述べることにする。

(注)

- (1) 稿者が発表してきた論考は以下の通りである。
- ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における「記録」(1)——単元「生活と記録」を中心に」(『国語論集 18』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 令和3年(2021)3月 pp.1-13.)
 - ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における「記録」(2)——単元「事実と記録」を中心に」(『国語論集 19』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 令和4年(2022)3月 pp.7-13.)
 - ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「読書」をめぐって」(『語学文学』第61号 語学文学会 令和4年(2022)12月 pp.5-16.) (以下、単元「読書」論文と略す)
 - ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「小説」をめぐって」(『国語探究』第2号 国語探究研究会 令和5年(2023)3月 pp.1-15.)
 - ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「古文入門」をめぐって」(『国語論集 20』北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 令和5年(2023)3月 pp.16-30.)
 - ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「紀行」を検討する」(『解釈』第69巻第5・6号 解釈学会 令和5年(2023)6月 pp.52-61.)
 - ・「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「学問への道」をめぐって」(『国語探究』第3号 国語探究研究会 令和5年(2023)9月 pp.8-33.) (以下、単元「学問への道」論文と略す)
- 「柳田国男監修高等学校国語科教科書における単元「随筆・随想」をめぐって」(『語学文学』第62号 語学文学会 令和5年(2023)12月 pp.7-16.)
- (2) 佐野比呂己「柳田国男監修検定高等学校国語科教科書の編集方針をめぐって」(『国語教育史研究』第13号 国語教育史学会 平成24年(2012)12 pp.6-7.)に全体の「柳田高校国語科教科書」の単元構成、教材配列について整理されている。
- (3) 「国語」研究会『「国語」学習指導の研究 高等学校一年全』(東京書籍 昭和32(1957)1月)
- (4) 注(3) p.200.
- (5) 注(1) 単元「読書」論文
- (6) 注(3) p.200.
- (7) 注(3) p.200.
- (8) 注(3) p.200.
- (9) 注(3) p.200.
- (10) 注(3) pp.200-201
- (11) 柳田国男監修『国語 高等学校一年下』(東京書籍 昭和29年(1954)9月 p.72.)
- (12) 注(3) p.200.
- (13) 注(11) p.73.
- (14) 本項執筆にあたって、天野貞祐『忘れえぬ人々 自伝的回想』(河出書房 昭和24年(1949)10月)を参照した。
- (15) 注(11) p.77.
- (16) 天野貞祐『真実を求めて』(雲井書店 昭和25年(1950)3月) pp.190-191.)
- (17) 算用数字は注(11)の頁を表し、○数字は行を表す。
- (18) 注(16) pp.14-15.頁
- (19) 注(11) p.78.
- (20) 本項執筆にあたって、鶴見俊輔『柳宗悦』(平凡社選書 昭和51年(1976)1月)を参照した。

- (21) 注(11) p.85.
- (22) 柳宗悦『民と美』(靖文社 昭和 23 年(1948)6 月) p.16.)
- (23) 注(22) p.7.
- (24) 注(22) p.382.
- (25) 注(22) p.384.
- (26) 注(22) p.385.
- (27) 注(22) p.388.
- (28) 注(22) p.391.
- (29) 注(11) p.86.
- (30) 本項執筆にあたって、東兎『雪と氷の科学者・中谷宇吉郎』(北海道大学図書刊行会 平成 9 年(1997)12 月)を参照した。
- (31) 注(11) p.100.
- (32) 『文芸春秋』(第 31 卷第 11 号 文藝春秋新社 昭和 28 年(1953)8 月 p.180.)
- (33) 注(11) p.101.
- (34) 本項執筆にあたって下記の文献を参照した。
清水茂『中国詩人選集 11 韓愈』(岩波書店 昭和 33 年(1958)1 月)
原田憲雄『漢詩大系 11 韓愈』(集英社 昭和 40 年(1965)1 月)
- (35) 注(11) p.105.
- (36) 注(1) 単元「学問への道」論文

※ 本稿は、科研費(19K02735、21K02428)の成果の一部である。

本稿は、佐野比呂己が全体を構想し、佐野理美が補助したものである。

(さのひろみ／北海道教育大学釧路校)
(さのさとみ／北海道厚岸翔洋高等学校)